2022 年 10 月 29 日裁判司法研究会議事録

１．概要

【日時】2022 年 10 月 29 日午後 2 時から午後 6 時半ごろまで
【会場】Zoom による遠隔研究会および会議
【出席者】
　玉江、大友、小林、林、巫（5 名）

２．議論の要約[1]

【ヘイトスピーチとは何か】

（巫）〈2008 年ごろから）裁判を批判する人たちと交流するようになったのち、会合などで頻繁にヘイトスピーチではないかと疑われる言動に遭遇した。ヘイトスピーチに対しては、「ヘイトスピーチ解消法[2]」として対策法も制定されている。ヘイトスピーチは社会問題であり、本会での研究会などでそのような言動は禁止することにしたい。
（小林）ヘイトスピーチとは何か。
（巫）ヘイトスピーチの定義だが、それ自体に多くの要素が包含されており、これを厳密に考察すると大変な労力を要することになる。そのような研究は省いて、安易だが、以下の wiki の日本語版で記述されている定義くらいをヘイトスピーチと考えれば足りるのではないか。

　ヘイトスピーチ（英: hate speech）は、人種、出身国、民族、宗教、性的指向、性別、容姿、健康（障害）などに基づいて、個人または集団を攻撃、脅迫、侮辱する発言や言動のことである。

　これだけでは、具体的な事例がヘイトスピーチにあたるか否かを確定することができないが、ヘイトスピーチ一般は〈反社会的な言動であるので〉禁止して、会の中でヘイトスピーチではないかと指摘される言動があったときに、その都度、それについて検討することにしたい。
（小林）ヘイトスピーチの概念の限界が明白でなければ、禁止するかどうか判断できない。
（巫）そもそもヘイトスピーチを概念的に禁止すると定めてこそ、ヘイトスピーチの概念の限界を確かめる作業が必要になるのであり、ヘイトスピーチを禁

[1] 議論の要約であり、この順で、この言葉通りの議論が行われたわけではありません。
[2] 平成二十八年法律第六十八号「本邦外出身者に対する不当な差別的言動の解消に向けた取組の推進に関する法律」

止する必要はなく、どんどんやりましょうという姿勢ならば、その必要はない。小林さんがヘイトスピーチを行う権利を保障して、どんどんやりたいのならば、私とは根本的に考え方が異なるので、この会ではなく別の会を作るなりして活動したらどうか。
（小林）そういう意味ではない。

【ヘイトスピーチの実例に関する議論】
（巫）私が最初に裁判所の庁舎の内外で裁判所を批判して集まっている人たちと交流するようになったときに、医療過誤裁判に関する人たちが比較的に多かった。それは、病院で治療を受けたときに、かえって健康を害したり、死亡したりするという事例があり、病院側が十分に情報を明らかにせず、説明に納得できない当事者が裁判で問題を明らかにしようとしても、裁判所は訴えをまともに聞こうとしないという状態が原因だ。
〈林さんが主催していた民法の勉強会でのことだと記憶するが〉医療過誤でご主人が亡くなったと訴える人がいて話を聞いた。その人は、元気だったご主人が入院して簡単に亡くなったことに不信感を持ち、医療過誤であったのではないかと疑うだけでなく、病院で故意に殺害されたのではないかと話していた。私は病院が故意に患者を殺害するという発想は現実的ではないと感じたので、その人に、「そのように思う根拠は何か？」というようなことを尋ねた。すると、その人は「〈病院が〉朝鮮人だからだ」と答えた。この発言に私は驚いて、そのようなことは言うべきでないと言ったが、会に参加していたメンバーは彼女の発言を諫めるどころか、同調する風で、実際にその病院が在日コリアンの経営の病院であるという情報が語られた。
　私は、彼女が医療過誤を疑い、裁判でそれを訴えたが聞き入れられなかった点では、病院が事実を隠ぺいした可能性、裁判所が訴えをまともに取り上げずに棄却したという可能性を否定しない。しかし、彼女の「朝鮮人だから人殺しなのだ」という部分の発言はヘイトスピーチであると思う。
（小林）それは発言者が愚かであり、論理的に成り立たない話をしただけではないのか？「朝鮮人だから殺人者だ」などという議論は、命題の証明になっていないのだから、その部分の説明を求めれば、発言者の誤りは実証されるから、それで解決するのではないか。
（巫）いや、その人の頭の中では「朝鮮人だから殺人者なのだ」という推論で論理的に完結していたように見えたし、周囲のメンバーもあえてそれを否定していないから、そこで立証が完成したと認識していたように見えた。だからヘイトスピーチといえるのだ。
（小林）発言者がどういう思考回路をしていようと、論理的に成り立たない発

言であることは明らかだ。そんな発言は無視すればいいのではないか。自分もいろいろ言われても、気にしないようにしている。
（巫）私も、その発言が支離滅裂であると思うが、論理的に成立しない発言と、ヘイトスピーチは異なる概念であり、異なる基準で判定するものだ。
私も、そういう経験が一回で終わっていれば、たまたまそういう変なことを言う人がいたとか、グループがあったというだけで、それ以上考えなかったと思うが、その後同じような発言が何度も繰り返されたのでそうはならなかった。問題なのは、ヘイトスピーチとデマ宣伝は、社会的に非常に危険だということだ。関東大震災の時の朝鮮人などの大量虐殺は、朝鮮人らに対するヘイトと、暴動を起こしたとか井戸に毒を入れたというようなデマが拡散され、警察当局などもその拡散に加担した結果、恐ろしい事態に発展したものだ。地方から来ていた人で、言葉がよくわからないからという理由で殺された日本人もいた。

【悪いヘイトスピーチと良いヘイトスピーチ】
（大友）「ヘイトスピーチ」の「ヘイト」とは「嫌い」という意味だから、ヘイトスピーチはそういう感情を語ることだ。前述の定義のようなヘイトスピーチはもちろん禁止すべきだが、だからといって〈私の言った意味での〉ヘイトスピーチをすべて禁止するということは、理由があってそういう発言をしたい人を圧迫することになる。つまり、ヘイトスピーチには悪いヘイトスピーチと良いヘイトスピーチがある。
私の経験から話すと、私は米国ロサンゼルスに住んでいて、家族で、日本料理店で食事をしたとき、料理店が以前と異なる雰囲気になっていることに気づいた。従業員が話す言葉が日本語ではなく、どうやら韓国語のようだった。メニューも変わっていて、以前の日本料理もあったが、そうでない料理もあった。そして、その店の経営者が元は日本人だったのだが、コリアンに代わったらしいという話を聞いた。その話だけでなく、アメリカの日本料理店はほとんどがコリアンの経営になっており、リトル東京などでもコリアンが幅を利かせているようだ。また、日本料理店といいながら、店名や品目名などが明らかに不自然で、アメリカ人には日本らしい名前に聞こえるが本当の日本人ならば決して命名しないようなものがある。このような状況を憂慮した日本の九州地方のある国会議員がアメリカの日本料理店で純粋な日本人が経営している店であることを示すステッカーを作成して店の扉に添付するという対策を推進しようと動いていたが、コリアン側の圧力で実現せず、その議員は亡くなってしまった。
私は日本人として、このようなコリアンの行為のために迷惑しており、そのことを強く主張したい。これは悪いヘイトスピーチではないと思う。

【アメリカにおける日本人とコリアンの関係】

（小林）私はアメリカに行ったときに、コリアンと日本人の関係で、日本人の方が上位に扱われると思っていた。ところがアメリカ人から見ると日本人とコリアンの地位は同じであり、下手をすると日本人の方が下に見られることもあった。

【日本におけるコリアンと日本人の関係と差別やヘイトスピーチ】

（巫）アメリカ在住の大友さんのような立場で、料理店の経験についてコリアンを批判することは、アメリカにおける両エスニックの力関係からいって、社会的な問題にならないかもしれないが、同じことあるいは同じ趣旨のことを日本で発言することはヘイトスピーチに発展する可能性が大きい。それは、日本の社会構造に問題があるからだ。

日本に限らず、差別の問題はどこの国にもあると思うが、ヘイトスピーチは日本で深刻な社会問題になり、「ヘイトスピーチ解消法」という対策法が制定された。日本のヘイトスピーチは様々なグループを攻撃対象にしているが、その中で頻繁かつ悪質に攻撃される典型的な対象の一つが在日コリアンである。彼らは戦後一貫して社会的に差別され、排除され、人権を侵害され、またマジョリティーとしての日本人による攻撃の標的になってきた。その原因は、日本人の間に育成されている差別意識とともに、制度的に日本の市民社会が在日外国人としての在日コリアンを排除してきたこともある。これは、戦後日本の政権の、人権感覚が完全に欠如した外国人政策、あるいは出入国管理体制の結果である。この問題に関する基本資料と私が考えているものは、私が若いころからお世話になっている一橋大学名誉教授の田中宏氏の『在日外国人[3]』という岩波新書の書籍だ。我々が戦後日本の外国人政策などについて、〈勉強不足のまま〉思い付き的に議論していても、なかなか核心に行きつけない。必要とあれば、時間をいただいてこの問題についてレジュメを作成して発表してもいい。

（小林）思い付きではないよ。私の意見は重要だ。

（巫）〈では、私の認識をうろ覚えだが話す。大日本帝国の旧植民地として、朝鮮と台湾があったが〉それらの地域の住民は、二級市民ではあったが、大日本帝国の臣民として、一応、日本内地に住んでいた場合には一定の権利を認められていた。日本の敗戦後、日本国内の彼らの地位は未定であったが、1952 年のサンフランシスコ講和条約の発効後、日本の行政機関の一部局に過ぎない法務省入管局の通達により実施された措置により、彼らは日本国民ではなく外国人

[3] 田中宏『在日外国人 第三版――法の壁,心の溝』、(岩波新書、2013 年 5 月 22 日

だということになり[4]、一切の公民権を失った。日本では外国人の子女は外国人とされるので、特定の無権利状態の人々のグループが制度的に形成されることになる。そして、彼らがマジョリティとしての日本国民の一部のヘイトグループの攻撃を受けている訳である。

【在日コリアンのルーツとエスニックグループの形成について】

（巫）〈大友さんが以前の研究会でコリアンのグループは血統に由来するものとして、鎌倉時代以降、各時代に来日したコリアンが純然たる日本人ではない同じグループを形成していると述べたことに関して〉私は十世代前に、朝鮮半島から日本に渡来した人々が、継続してコリアンのアイデンティティーを保つことは不可能だと思う。

（林）〈遅れて参加して〉私は京都に親戚がいるが、京都では十世代前の先祖が中国人だったとか朝鮮人だったとか語る人はざらにいる。そのように語り、自分のルーツにプライドを持っている人たちがたくさんいる。アイデンティティが維持されるのは特定の職業などを代々世襲していくような場合だ。

（巫）その話は大友さんと私の会話の主題とは無関係だ。割り込んで会話を邪魔しないでほしい。

（林）巫は研究会の参加者の自由な発言を許さない。このような強圧的な姿勢は改めるべきだ。

（巫）そういう問題ではない。

（大友）全部ではないが血統的にグループを形成できるのではないか。

（巫）〈林さんに〉林さんは十世代にわたり中国や朝鮮のアイデンティティを維持する人を多く知っていると述べたが、何人ぐらいそういう人を知っているのか。

（林）数の問題ではない。文化の問題だ。巫の認識は一面的で話にならない。

（巫）林さんが十世代にわたり朝鮮などのアイデンティティを保つ人たちをたくさん知っていると言ったから、何例くらいあるのかを聞いただけだ。

（林）京都では袋物を製作する人がいるが、京都人は袋物を一人では作らず、いろいろな工程の職人がいる。

（巫）染め物の製造工程の話はいいから、具体的にそういう人にどういう話を

---

[4] 1952 年当時、日本国は朝鮮半島を代表するいかなる政権とも国交を結んでおらず、中国代表政権問題では台湾の国民党政権を承認する姿勢を長く維持し、中華人民共和国とは国交を結ばなかった。日本政府は外国人登録法を制定し、在日コリアンや台湾人を含む在日中国人に登録証への指紋押捺と常時携帯を義務付けたが、国名欄には国際的に認められている政権が統治する国名を記載することができなかった。そこで、中国人については、「中国」、コリアンに対しては「朝鮮」という文字を記載し、これは国名ではなく地域名であると主張した。1965 年の日韓条約後、在日コリアンの外国人登録に「韓国籍」と「朝鮮籍」の二種類が発生するようになった。

聞いたか話してくれませんか。
（林）私の親戚でそういう人がいる。
（巫）その方は祖先がどちらといっているのですか。
（林）その人は朝鮮半島ですね。朝鮮人です。
（巫）朝鮮人じゃないでしょう。大昔の祖先が朝鮮から来たと言っている日本人でしょう。
（林）あなたは法律上の話に限定しているが、日本には朝鮮や中国と古くからの往来があり、文化的な話なのです。
（巫）では、その方と在日コリアンなり韓国朝鮮から最近来た人なりが会って、お互いに私たちは〈同じ〉コリアンだとアイデンティティを確認することができるのですか。
（林）私はそんなことを言っていない。文化の話を言っているのです。
（巫）いや、何世代さかのぼっても同じグループとして維持できるという話があるから、それを確認したのです。
（林）私はそんなことを言っていない。ルーツに誇りを持つ人のことを言っているに過ぎない。誰がそんなことを言ったのですか。
（巫）大友さんがそういうことを言ったので、そのようなことが可能かどうかを話しているときに、林さんが口をはさんできて、似て非なる話題に話をそらしたのですよ。
（林）巫の言い方は強圧的でおかしいよ。

【日本で認識できるコリアンというエスニックグループの範囲について】
（巫）ですから、日本からみて「コリアン」というグループとして分類できる人々の範囲は、〈1910 年の〉韓国併合により大日本帝国の植民地にされた朝鮮地域の人々を起点にして、大日本帝国の臣民として日本に来て、戦後も日本に残ったコリアンとその子孫、大戦後独立した朝鮮半島から戦後に日本を訪れた人々、さらに、朝鮮半島の本国の人々というくらいの人々の範囲で、それ以上前の時代には遡れないのではないでしょうか。
（林）巫さん、それはおかしいよ。私は、日本で多くのコリアンと付き合っています。東北の大学に 6 年間通った、そこでもコリアンと交流があった。私の診療所にはコリアンの患者が来るのでその人たちとも交流がある。また、東上野のコリアンタウンの人とも交流があるし、小学校のころにもコリアンのクラスメートがいた。
（巫）林さんがコリアンの人たちとの付き合いがあることは誰も否定しないけれど、だから何が言いたいのですか。
（林）巫はこうやって人の話を遮って最後まで聞こうとしない。話にならない

よ。
（巫）最後まで聞くと言っても、何が主旨なのか不明な話を延々と語り続けるだけで、商売の話とかを無限ループのように話し続けられたら、話を遮るしかないでしょう。最後までといったって、林さんの話は最後がないんだから。
（林）話にならない。
（巫）だから、コリアンという概念で区分できる人々の範囲についての私の考えを否定するのですか。今の林さんの話は、私の提案した範囲内でのさまざまなコリアンの人々との交流を述べているわけだから、私の提案を何ら否定していないでしょう。
（林）じゃ結論を言いますが、コリアンの概念というのは、コリアンでない日本人の私や中国人だという巫が決められるものではなく、コリアン自身が決めることができるものだということです。
（巫）ということは、〈この場に〉コリアンがいなければコリアンという概念を確定することができないということですか？つまり、コリアンという言葉を共通して議論することができないということですか。そんな馬鹿な話はないでしょう。
（林）コリアンという概念をだれが決められるのですか。コリアンでない人が決められるのですか。
（巫）概念というのは誰かが主観的に決めることができるのではなく、社会的に意味が定まっていて、それを各人が共有することで会話ができるのでしょう。それを否定してコリアンがいなければコリアンの概念を決められないということは、コリアンという概念について会話することが一切できないということでしょう。そんな馬鹿な話はないよ。

【歴史問題と日本の歴史教育】
（巫）林さんが言った通り、在日のコリアンの中にも、歴史問題などにあまりこだわらず、日本人の感覚に近くなっている人もいるし、意識して考えている人もいるわけですよね。つまり、コリアンが一つのグループを形成しているという大友さんの仮説を林さんが否定していることになりますよね。
（林）私は巫との話をしているので大友さんとの話はしてませんよ。
（巫）でも結果的にはそうなります。
（小林）私が本国のコリアンと話すときには、必ず歴史問題に触れられますよ。だから、その点は注意しなければならないと思っている。
（巫）どういう注意ですか。
（小林）日本が悪いことをしたのだから申し訳ないということです。
（巫）それは前の世代の話で小林さんが申し訳なく思うことはないでしょう。

まあ、しかし、戦後の日本国もその点について補償をせず、在日コリアンに対する人権侵害を改善せずに今日に至っているのだから、その点については加害責任があるかもしれませんね。
　本国では当然、自国の歴史について学校で教えるのだから、そういう歴史認識の上で日本人と付き合いますよね。しかし、日本では全然その点について教えないので、「日本が朝鮮を植民地支配などしたの？わからない。」などという子供が育ってしまい、コリアン〈や中国人〉との会話でその点が食いちがうことになりますよね。

＜巫のコメント＞歴史を知っている人と知らない人が歴史について話をしたら、知らない人は相手を説得できないでしょう。その場合の考えられる対応は、自分を正当化するために、相手を人格攻撃してつぶそうとするか、歴史を書き換えて居直るか、極度に自信を無くすか、いずれにしろろくなことにならない。つまり、こういう問題は、「反日教育」をしているという中国・韓国の問題ではなく、歴史をきちんと教えない日本の問題だと言える。

（小林）当時、戦争していたのだから。
（巫）いやいや、戦争はしていないでしょう。朝鮮は日本の植民地だったので、朝鮮人は日本の戦争遂行に協力させられ、青年は徴兵されて、戦地で戦ったのではないでしょうか。特攻隊に行った朝鮮の若者もいたでしょう。
　ところが、戦後、そういう軍属について、日本人には支給する軍人恩給を、もう日本人ではなくなったのだからといって、まったく払わなかったのですよね。そういう意味で、この問題は戦後にも継続して現在に至っていると思います。
（小林）六、七十年前に私が習った歴史教科書と現在の歴史教科書はまったく別のものになっているようですね。
（巫）家永教科書裁判のような教科書検定が始まる前は、教科書は自由に作成していたのですかね。その後、教科書検定で歴史教科書の内容はひどいことになった。しかし、八十年代くらいに韓国と中国の政府が日本の教科書について抗議したので、近隣諸国の意見も考慮して教科書を作るというような方針になり、少し、改善された。ところが、その後、新しい教科書を作る会のような運動が盛んになり、歴史教科書の内容は完全に歴史修正主義の方に行ってしまって現在に至っているということでしょうか。
（小林）こういう風にして日本は右傾化してしまった。

【だれだれさんは朝鮮人だという言説の起源と構造】

（巫）植民地支配の時代に、日本政府は朝鮮に対して創氏改名という政策を実施し、朝鮮名を日本風の名前に改めさせた。ところが、日本国内に住んでいる朝鮮人が日本名を名乗っていると、あの人は実は朝鮮人だなどといって、いじめるといったような現象が戦後にあった。これが、「だれだれさんは朝鮮人だ」説の基本形だと思います。

＜巫のコメント＞こういうことが学校などで問題になった時には、傷ついた被害者の子供に対し、「朝鮮人だって同じ人間なんだ、恥ずかしがることはない」などと日本の先生などがなぐさめて、問題を収拾するというのが一つのパターンになっていたのではないかと思う。この発想と同じことが、ヘイトスピーチの解決について会員からしばしば語られます。

土井たか子朝鮮人説や池田大作朝鮮人説は、この言説の形態を踏襲していますが、内容的には別で、自分と意見の異なる人を貶めるために、安全に貶めることができると思っているコリアンを引き合いに出して、XX さんは朝鮮人だと言いふらすという現象だと思います。

なお、土井たか子朝鮮人説は WILL という雑誌にそのような説を書いた記事が掲載され、WILL が民事訴訟で敗訴して謝罪文の掲載と賠償金を土井側に支払った経緯があります。大高さんが土井たか子朝鮮人発言をした研究会の翌月の研究会までに、私はその点を wiki で調べて、国会図書館から資料を取り寄せて説明したのですが、大高さんはその会以降研究会に来なくなり、説明を聞かなかったわけです。

【日本の状況悪化を食い止めるべき司法の役割について】

（小林）日本は右傾化してしまったのだが、司法がしっかりしていたらこういう動きは食い止められたはずだ。

（巫）そうですね、日本が悪い方向に進みそうになる時に、司法はそれを強力に食い止める可能性のある機関の一つですね。

（小林）しかし、日本の裁判所はその役割を全く果たしていない。

（巫）本当にそうですね。最高裁判所なんか、なんなんだろう。

【林氏の巫に対する人格攻撃】

林氏は、ヘイトスピーチの議論とは無関係と思える話を続け、その内容について巫が質問すると、巫に対する罵倒や人格攻撃で質問をはぐらかし、その後、人格攻撃を延々と続けて、さらに、巫の人格に問題があるから、ヘイトスピーチの問題を語る資格がないと主張した。林氏の真意はよくわからないが、結果的には、問題を巫の人格問題にすり替えて、ヘイトスピーチに関する議論自体

を封じようとしたと言われても仕方がない態度だったと考える。

【未整理の主張】

林さんや小林さんから、直接、間接に、わかりにくい主張が語られましたが、私がその趣旨を要約します。大体、次のようなものではないかと思うのですが、不正確かもしれません。これらの主張は明白に語られたものではなく、言外にそういう風に解釈できなくもないというようなものだったので、議論は進みませんでした。

① 言われても気にしなければいい。
＜巫のコメント＞ヘイトスピーチの罪悪を、言われた人が帳消しにすることはできない。

② コリアンも日本人も同じ人間なのだから、その点を確認すれば解決する。
＜巫のコメント＞ヘイトスピーチで侮辱することが問題であり、侮辱された方をなぐさめることは、解決ではない。

③ ヘイトスピーチとされる発言をする人に、差別意識はない。
＜巫のコメント＞差別意識を自覚せずに差別発言をする人が最もたちが悪い。

④ ヘイトスピーチかどうかは言われた本人だけが判断できるのだから、第三者がそれについて議論すべきではない。
＜巫のコメント＞ヘイトスピーチを受けた人間に責任を転嫁する発想か？巫としては意味がよくわからない。

⑤ ヘイトスピーチだと感情的に攻撃することは、逆ヘイトだ。
＜巫のコメント＞ヘイトスピーチかどうかが問題であり、その議論の行き違いは問題の根本を変えるものではない。

⑥ 自分は在日コリアンの知人がたくさんいて、円満に付き合っている。
＜巫のコメント＞ヘイトスピーチの問題とは関係ない。

⑦ ヘイトスピーチの概念が確定できないので、禁止することはできない。
＜巫のコメント＞議論の初めに wiki の定義をあげた。概念の確定が必要ならば、さらに労力を投下して、研究することになるのか。

⑧ 巫の司会、議長としての議事進行が下手だ。
＜巫のコメント＞巫の議長としての交通整理を無視する人がいるので、議長の役割を果たせない。

⑨ 日本は侵略戦争をして悪かったが、75 年以上前のことだから、目くじらを立てて責めるのはおかしい。
＜巫のコメント＞この議論で 75 年前の侵略戦争の問題は一度も語られていない。現在の日本のヘイトスピーチの問題、特に裁判正常化道志会の中

でのヘイトスピーチの問題を議論している。

【結論】

いろいろな主張が語られ、議論がかみ合わないところも多く、結論を導くところまではいけませんでした。

とりあえずの決定事項として、日本語化されている「ヘイトスピーチ」という言葉は、大友さんのいう「悪いヘイトスピーチ」を指しているので、本会では禁止することにします。

３．次回の予定

研究会は隔週で土曜日に開催しておりますが、2 週間後の 11 月 12 日は zoom ホストの小林さんの都合が悪いので、次回は、一週間遅らせて、日本時間 2022 年 11 月 19 日（土）14 時から 18 時くらいまでの Zoom 会議とします。Zoom ホストは小林さんです（米西部時間では、2022 年 11 月 18 日（金）22 時から 26 時くらい、米ハワイ時間では 18 時から）。

2022 年 11 月 3 日

巫召鴻